

二〇〇〇年度国文学会彙報

二〇〇〇年度国文学会活動状況

〈新人生歓迎会〉 二〇〇〇年四月七日 新島会館 学生部会主催

〈国文学会総会、研究発表会〉

二〇〇〇年六月一八日 光塩館会議室

・総会

・研究発表会

昭和一〇年代と織田作之助「夫婦善哉」

西村将洋（本学大学院博士課程前期課程）

新聞の四コマ漫画における音象徴語の調査報告

金裕成（本学大学院博士課程後期課程）

文字符号による表現 玉村文郎（本学教授）

〈講演会〉

・安藤徹氏講演会―文学研究における対象の設定と方法について

二〇〇〇年二月二日 至誠館地下2番教室 院生部会主催

・三代目魚武濱田成夫氏講演会

二〇〇一年一月二四日 至誠館3番教室 学生部会主催

〈同志社国文学〉

第五三号 二〇〇〇年二月二五日発行

第五四号 二〇〇一年三月二〇日発行

〈国文学会会報〉 第二八号 二〇〇一年三月二〇日発行

二〇〇〇年度修士論文題目

『栄花物語』巻第一「月の宴」和歌考 宮崎 あや

『明月記』の文学性 滝沢 優子

―感情表現と「家の意識」を通して―

延慶本『平家物語』終結部考 田之本 麻衣子

―物語世界における後白河法皇と頼朝―

「建礼門院物語」の再検討 内山 みな美

―『平家物語』における生成をめぐって―

芝居を扱った絵入狂歌集 二畠 令子

―『戯場百人一首』を中心に―

「楊貴妃像」をめぐって 李 蓓

―中日文学における白居易の受容と影響の比較を中心に―

明治の紀行文家を呪縛した「写生」と「探険」

―小島烏水の紀行文及び紀行文論を足掛 熊谷 昭宏

かりとして―

武者小路実篤『友情』におけるメーテルリ

ンクの受容と表現

——「自我」から「自然」へ——

文学におけるモダン都市「神戸」

——一九二〇年代から一九三〇年代を

中心に——

新即物的横断線へ

——一九三〇年代の日本近代とナショナル

リテリの考察——

「家族会議」論

——成立背景と「動き」の考察——

日中両言語の敬語の対照研究

日本語の「ノダ」文と中国語の「是」字文

二〇〇〇年度卒業論文題目

『万葉集』にあらわれた「夢」

「軽皇子宿于安騎野時柿本朝臣人麻呂作歌」

における軽皇子と曰雙斯皇子命

『古事記』の伊邪那岐命の黄泉国訪問について

額田王作歌の成立形態

——作者異伝のある歌について——

玄 政 勲

野 村 尚 子

西 村 将 洋

北 畑 系 枝

陶 宇 澄

門 脇 麻 美 子

越 智 さ お り

伊 賀 上 好 信

「松浦河に遊ぶ」歌群の考察

——漢文序と歌との関連を中心に——

高橋虫麻呂の方法

——「上総末珠名娘子」及び「勝鹿真間娘

子」の歌を中心に——

泣血哀慟歌二首をめぐって

『今昔物語集』における猿神退治

『宇治拾遺物語』巻二ノ七「鼻長き僧の事」考

『今昔物語集』「天王寺僧道公語」考

『今昔物語集』「中務大輔娘」運命考

——巻三十第四話をめぐって——

『宇治拾遺物語』薫しへ長者考

『今昔物語集』僧迦羅伝説考

『御伽草子』「鉢かつぎ」和歌考

『今昔物語集』源博雅考

『御伽草子』「浦島太郎」

『今昔物語集』における竹取翁伝説

『今昔物語集』「是害房」考

——巻20第2をめぐって——

『酒吞童子』における三つの問題点

『宇治拾遺物語』第184話の研究

今 村 由 美 子

岸 田 直 美

山 口 恵 里

橋 本 知

林 千 恵

加 藤 裕 子

小 屋 良 美

門 川 真 章

大 平 宏 美

大 西 克 法

迫 田 馨

田 中 彩 子

豊 加 翠

山 床 美 智 代

浦 池 沙 知

山 田 百 合 子

『落窪物語』における継子いじめ

——邸弟を中心にして——

横田 香織

『うたたね』の表現に関する一試論

——阿仏尼の意識・意図を考える——

石井 千栄子

『とはすがたり』の主題に関する一考察

——後深草院二条の出家を中心に——

石川 貴士

冷泉家時雨亭文庫蔵『隱岐本 新古今和歌集』

の位置付け

金子 雅代

能における道行

坂東 不可止

『東海道中膝栗毛』「発端」の弥次郎兵衛・北八像

初編から『続膝栗毛』四編までとの対比——衛藤 美和子

『武道伝来紀』における西鶴の方法と創作意識

『春雨物語』「樊噲」論——共同体と個と——驚見 奈都子

『曽根崎心中』における「観音廻り」の意義

石岡 元

観音廻りの必然性と近松の視線

市川猿之助にみる歌舞伎——伝統と創造——尾崎 裕香

女方——その芸と魅力についての考察——

井原西鶴「本朝二十不孝」における創作意識

——親子関係を手懸りに——廣田 知子

『新版歌祭文』の成立方法

——「お染久松」もの比較——岡田 元美

『人間万事虚誕計』前編（式亭三馬作）と

後編（滝亭鯉丈作）との比較

大平 展代

初期草双紙嫁入物の展開

——かくれ里ふく神嫁いりを中心に——

大野 祐子

逃れられない悲劇の哀れさと近松の描いた

お千世像について

杉浦 志保

——『心中宵庚申』に見られる近松の意図

中之巻以降を中心に——

内なる多面性の物語

——宮本輝『避暑地の猫』を論ず——

山本 直哉

司馬遼太郎「殉死」論

——乃木殉死の意味したもの——

深沢 謙

「みずから我が涙をぬぐいたまう日」論

芥川龍之介『西方の人』

住友 直子

——母性の欠如と代償としての彼の芸術

と宗教について——

久世 貴章

「敷の中」論

——事件の真相から読み取れる芥川の心境

廣瀬 絵里子

同時代評としての『料を論じて』『伽羅枕』に及ぶ／

による『伽羅枕』及び『新葉末集』

細谷 光宏

『虞美人草』における語りの悲劇性について

永井 一樹

江戸川乱歩の幻想

——「押絵と旅する男」論考——

「上海」論

鹿地巨論——戦前・戦中・戦後——

「私は海をだきしめたい」論

——坂口安吾の海——

「女生徒」論

——有明淑の日記との比較において——

安部公房『方舟さくら丸』論

——内運動する自由——

村上春樹『ノルウェイの森』

——緑の「病めるが故のタフネス」——

「図書館奇譚」——謎が多いからこそ面白い——

「めくらやなぎと眠る女」／「めくらやなぎと眠る女」

眠る女

——初稿、改稿、再改稿を比較して読む——

遠藤周作『深い河』

——魂をゆさぶるもの——

「銀河鉄道の夜」論

——捨身布施に関する研究——

坂口安吾「桜の森の満開の下」の劇的要素について

栗林正幸

矢部靖人

藤本亜矢

能勢さや香

山口朱美

藤井信介

碓井美穂

藤原智仁

中嶋信広

佐塚千恵子

石井謙太郎

近田啓介

村上春樹『ねじまき鳥クロニクル』における

髪型の記述について

デタツチメントによるコミットメントへの道程

——村上春樹『ねじまき鳥クロニクル』論——

村上春樹 離婚作品の魅力は何か

遠藤周作『死海のほとり』論

——「二重小説」が描き出すイエス像——

『たぐれ』におけるお増の女性観についての

考察

——娼妓と『青鞥』『新しい女』の視点から——

村上龍と音楽

「桜の森の満開の下」

——生首描写を核とした美——

横溝作品の「村」分析にみる「村」の持つ

意味

阿部和重論——「公爵夫人邸の午後のパーティー」

以降にみせた変化——

遠藤周作「白い人」における映画の技法に

関する考察

中上健次論

——秋幸三部作に見られる中上健次の深層

心理——

福島美紗子

正田直樹

日向郁美

五十嵐麻貴

入江慶

木下成人

小山景子

熊谷道代

西山祐子

嶋津智子

園木崇史

吉行淳之介『砂の上の植物群』論

—— 内的リアリズムの意味 ——

山本敦子

開高健著『日本三文オベラ』における在日韓国・朝鮮人の姿

—— 矢野竜也 ——

矢野竜也

村上春樹「ダンス・ダンス・ダンス」と八十年代ファーストフード文化事情との相関関係

—— 中澤大樹 ——

中澤大樹

箱男のコミュニケーション論

益山知也

翻訳家・井上勤

花田瑞子

『春琴抄』『吉野葛』の人物像

—— 地歌伝承世界からのアプローチ ——

赤井早智

太宰治『人間失格』論

小宮山由梨

筒井康隆の実験的手法について

力久竜治

「秋」と芥川龍之介

鈴木吾郎

芥川龍之介の作品と中国文学作品について

黄燦

立身出世・家庭・個人主義

今野和仁

—— 徳田秋声「新世帯」を中心に ——

坂口安吾「エリック・サティ（コクトオの訃及び補註）」

—— 翻訳、サティを通して発見したもの ——

杉尾志帆

日本語文章の電子化における諸問題

—— 同表記語とおして ——

福田篤志

俵万智による『みだれ髪』の再生

—— 語彙・用語を中心に ——

東根直樹

テレビアニメのタイトルにおける文字体系の使用意図とその効果について

三島由紀夫と他三作家のオノマトペ使用について

一居久美子

新聞記事表現の比較

—— 毎日・朝日・両新聞スポーツ欄を通して ——

川村真由美

方言調査による大阪ことばについての考察

『広辞苑』における同語異表記

中島良

謡曲における音象徴語の研究

齋道里香

助詞「ヲ」の機能と表現価値について

平井真純

—— 『方丈記』と先行研究資料における歴史的考察 ——

金剛典子

辞書の見出し語の選定と辞書編集に関する考察

村田法子

美化語『アゲル』の使用範囲拡大の推移

中野友恵

略語の日中対照比較

角田智恵

—— 語構成を中心に ——

樋口裕子